



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

独参湯

これは漢方処方名で、「どくじんとう」と読みます。名前のとおりで、人參だけの処方です。以前漢方の勉強会で先生が、「人參一味をもって処方となす」と言われ、インパクトがありました。

たとえばよく知られている「葛根湯」は、葛根・麻黄・桂枝・芍薬・大棗・甘草・生姜の八味はちみで構成されています。民間薬で、たとえば「十薬」「ゲノシヨウ」など普通はそれだけの単品でお茶として用いますが、漢方薬は数種類の生薬を組み合わせています。それぞれの生薬の薬効を長年にわたる経験により完成したものです。

人參はウコギ科のオタネニンジン Panax ginseng の根にあたります。

「バナックス」とか「ジンセン」といった文字を目にしたことはないでしょう。

か。「オタネ」は漢字では「御種」と書き、八代將軍徳川吉宗が人參の種を各地の大名に配り、栽培を奨励したのでこの名が残ったようです。吉宗は人參の素晴らしい効果を自身で体験でもしたのでしょうか、それとも当時の人參ブームに乗っかり、しっかりと蓄財に励んだのでしょうか？

「人參飲んで首括る」とか「孝行は鍋の中に身を投げる」なんて川柳があります。テレビで時代劇が流行った頃、よくこのエピソードを連想させる話がありましたね。

ちなみに、お料理に使ったニンジンハセリ科の植物で、緑黄色野菜の優等生でβ-カロテンを多く含有しビタミンAとなります。脂溶性ですから油を使った料理法でより吸収度が高まります。

さて独参湯の話に戻しますが、数本の人參を用い一昼夜気長に煎じ、箸がスーと入るくらいまで煎じます。濃く煎じて頓服的に使います。このでの使用の応用は、大病・大出血・創

傷・激しい嘔吐や下痢・発汗過多・感染症など、元気が虚衰して生じるシヨクshyokuの救急に用います。

また、普通の量たいていで久病くびょうにも使います。

人參には漢方的な用語として「補気・回陽・安神・生津・止渴」など独特な言い回しがあります。

今の時代、救急医療が充実していますので、このような人參の使い方はされないでしょう。

歌舞伎で『仮名手本忠臣蔵』というお題目があり、別に「独参湯」ともいわれます。それは、人參の万病に効く起死回生の特効薬的な効果から、たとえに言われているようです。

外す事無く、大当たり間違いなし！
今はテレビの視聴率の数字で制作側は一喜一憂、青色吐息。歌舞伎の世界もご同様、時代は変われども同じのようです。

(東灘区 鹿嶋 純子)